吉田健一著作集

XV

大衆文學時評

集英社

吉田健一著作集 第十五巻
大衆文學時評
昭和五十四年十一月二十日 第一刷印刷
昭和五十四年十二月四日 第一刷發行
著者＝吉田健一
發行者＝堀内末男
發行所＝株式會社集英社
東京都千代田區一ツ橋二丁目五番地一〇號
電話＝東京（二二三〇）六三六一〈文藝出版部〉
東京（二二三八）二七八一〈販賣部〉
整版所＝株式會社中臺整版
印刷所＝大文堂印刷株式會社
製本所＝株式會社石橋製本工場
© 1979 Nobuko Yoshida, Printed in Japan
0395-171015-3041 落丁本・乱丁本はおとりかえします

吉田健一著作集 第十五巻 目次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

大衆文學時評
昭和三十六年　七
昭和三十七年　六四
昭和三十八年　一四〇
昭和三十九年　二二五
昭和四十年　二六九
解題　三三三

大衆文學時評

昭和三十六年

四月

讀める作品に出會ふといふのはこの頃の所謂、文學と付き合つてゐる限り、滅多にないことである。これは批評、小說その他、一切を含めての話であつて、それでさういふ作品があれば、一も二もなくそれを傑作、或は少くとも佳作と決めたくなる。誤解がないやうに、その反對の、讀めない作品の筆頭に週刊誌に載る小說類を擧げて置く。次は所謂、純文學の小說と大學の先生達が書く各種の論文だらうか。併しここで扱ふ作品は讀めるものばかりであつて、それが先づ不思議な感じがする。讀めるから傑作であることにはならなくて、それが文學の出發點である筈だつたことを改めて思ひ出すのである。或は、外國の雜誌を讀んでゐれば當り前であるこのことが日本の文學界で通用してならない理窟はどこにもないことに氣が付く。

文學であることから出發してゐるものは勿論、文學であつて、我々はさういふ作品を材料に與へら

れて始めて廻りくどい解釋拔きで文學に就て語れる。例へば、文學が人間を描くものであることは我我にとつても常識になつてゐる筈でありながら、「オール讀物」四月號に載つてゐる寺内大吉氏の「不老長壽」などは人間を描くといふ種類のことを通り越して、そこには人間がゐる。それは夏目漱石の「坊つちやん」までは日本の文學にも人間がゐたといふやうな區切りが付けたくなる位、我々の胸を強く領する印象であつて、泰山僧正といふ一人の人間がそこにゐるのだから、後はこの坊さんが何をするか見てゐればいいといふ狀況が我々の生活感情と一つになつて、先を讀む方へ我々を誘ふ。これは一人の人間であるので、かういふ賴りがない存在もよく考へて見れば人間なのだといふことではない。現實に長生きした人間と同樣に、我々は泰山僧正が百四歲で元氣に在職してゐることを不思議に思ふよりも、そのことを眼前の老僧から受ける印象に加へてこの人ならばさうなるべきだと感じる。

どうでもいい人間といふものは、先づあり得ない。わざわざ人間に就て書く以上、そのことははつきりさせなければならなくて、泰山僧正も毎月の雜誌に束になつて登場させられる小說の人物の類ではない。さういふのとは違つて、生きてゐる人間であれば、これは當然のことであつて、和尙は百を過ぎるまで生き、その生涯を通して說いて來たことに從つて往生の正機を得るのに、といふのは、その弟子である昌圓師の言葉を借りれば、「正しい時に、正しい死に方をする」にはどうすればいいか、その方法に就て遂に戸惑ふ狀態に達する。自分が一つの目的を果すのに必要であると信じて行つて來たことがその目的を實現するに至らなければ、人間はその時、啓示を待つ他ない。これは、それまでして來たことに萬全を期したからこそである。泰山僧正も啓示を得て、これからはそれまでの逆を行くのだといふことに決める。一生を往生の正機を摑む爲に規則的に過して來た人間が、今度は一氣に

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

亂行に傾く。

この轉機は爽快である。和尚は町の子供に早寢、早起きするやうに言つた瞬間に、自分はそれを止める決心をする。又、醉つ拂ひが道端に倒れてゐるのを見て、酒といふことに心を留める。門前の店の婆さんが和尚の寺にこつそり花を引きに行つてゐると聞いて、博奕といふことが頭に浮ぶ。それを知らせてくれた婆さんの孫娘が、女といふことを和尚に暗示する。これで疑問は解けて、和尚は翌日から何時までたつても起きず、心配して樣子を見に來た執事の坊主に酒を持つて來させ、夜は花札の相手をさせ、門前の店にゐる婆さんの孫娘を自分に世話するやうに言ひ付ける。生きてゐるのはこの泰山僧正だけではない。執事の坊主が和尚の變り方にたまげるのは我々と同樣であつて、婆さんの孫娘が和尚と最初の一夜を過し、「お淨土へ来たみたいだわ、」と言ひ、次に、「あたし、今ものすごく幸福よ。だってこんなお偉い御法主樣のスケになっちゃったんだもの、」と口走る時、この二つの句で我々にとつてもこの女は現實の存在になる。

從つて又、泰山僧正が振り袖姿のフーちやんを膝に乘せてゐ竝ぶ坊主達に念佛を百遍唱へさせて往生するのは、この作品の必然がさうさせるのであつて、それ故に我々はそれを疑はない。もともと凡ては文學の世界の出來事だつたので、この作品が實際に何かさういふ逸話でもあつたのから取材したものかどうかといふやうなことは問題ではない。實際にあつた所で、それが作品では嘘になることもあり、あつたことよりも、あり得ることであることに一切が掛つてゐて、泰山僧正の話があり得ることであることはこの作品が示してゐる。

寺內氏は「小說中央公論」春季號でも、やはり一人の坊さんの行狀を扱つた「競輪上人隨聞記」を

書いてゐる。これは競輪に凝つた坊さんが競輪の豫想屋になつて說教することを思ひ立つ話で、これを讀むと、競輪場の現實の中に否應なしに我々を引き込むことでそれと同じものが登場人物の現實、又その血肉をなしてゐることを我々に納得させる寺內氏の手法がはつきり感じられる。と言つても、これが凡て小說家と呼ぶに足るものの手法であつて、寺內氏は小說の常道を踏むことに見事に成功してゐるまでである。この作品も、又「オール讀物」のも、そして確か「文藝春秋」の先月號に載つたのも、終りに「わが高僧傳より」としてあるが、これが出來上れば、一册の異色の短篇集が日本の文學に加へられることになる。

讀める作品と言へば、推理小說といふのは讀めなければ全くどうにもならない形式であつて、それ故に今日のやうな狀態では、推理小說であるといふことだけで或る程度の期待を持つことが許される。「オール讀物」に水上勉氏が「黑い穽」を書いてゐる。水天宮の界隈に建つてゐるビルで高利貸しが殺されてゐるのが發見される話で、誰がやつたかを知るのは勿論、讀者の樂みである。併しかういふことを言ふのは許される筈であつて、主人公の鶴田刑事が我々を惹くのは、或る一つの謎にぶつかつてそれを解かうとする、少しも超人的ではない人間の姿がこの人物に認められる所にあつて、その行動の上での閃きとも見えるのは、例へば、出口が一つしかないビルから犯人が出る爲には、どうしてもその出口の所にゐる人間の前を通らなければならないといふやうな、我々も說明を聞けば直ぐに納得することばかりである。探偵小說といふのは納得づくで行くことになつてゐるが、そこに一つの問題がある。

將棋の駒の動かし方も、その說明を聞けば解らないことはない。併しそれが手が込んだものになれ

ばなる程、素人には幾ら説明されても付いて行き難くなつて、探偵小説を書くものにも、その讀者にも、これを一種の紙上の將棋と見てゐるものがあるやうである。併しこの點を突き詰めていけば、探偵小説はそれが文學である部分だけ無駄であることになり、しまひには言葉を使ふのをやめて圖式にでもした方が手つ取り早くはないかと思はれて來て、それならば、いつそのこと將棋をやつてはどうかといふことになりはしないだらうか。推理小説が小説である限り、その推理の部分を飛ばしても讀めるものでなければならない。併し推理も小説の一部をなしてゐるのであるから、そこも文學の形を取り、全體が事件の解決に向つて進むことが必要である筈で、例へば「黑い穿」では、主人公が黑木といふ辯護士に向つて自分の氣持をありの儘にぶちまけることが一つの鍵になつてゐて、その爲にこれを聞いてゐた祕書に心境の變化が生じるといふのは、探偵小説の鬼と呼ばれる人種には邪道に思はれるかも知れない。それだから將棋でもやつた方がましなので、人間が人間であることを凡て活用しての小説でなければ、推理小説が小説の仲間入りをすることはなくなる。

推理小説を評してその犯人を言つてはならないことになつてゐるが、「黑い穿」では殺人事件の本當の犯人が社會全體、或は少くとも、それを動かす大資本といふやうなものであることになつてゐて、水上氏の手腕から察すれば、氏の作品の主人公が何れはそれと取り組むことになることが期待出來る。これは何も、社會正義のことを言つてゐるのではない。それは政治によつてしか達せられなくて、ここでは、相手が大きければ大きい程、それがとつちめられるのを讀む樂みが增すといふ極めて簡單な事實が指摘したいのである。作者が考へる殺人事件が架空のものであるならば、架空の大資本、大集團があつても少しも構はない筈である。

これに對して黑岩重吾氏は初めから現在の社會の機構を一つの殺人用の機構に見立てた小說を書かうとしてゐるやうに思はれる。例へば「日本」四月號の「女蛭」では百貨店の宣傳部長とか、そこの社長の娘とかいふ地位が筋の進展に對して大きくものを言ふ役割をしてゐて、それを各人物から取り去れば、後には極く僅かなものしか殘らなくなる。

我々がしてゐる實際の生活でさうなのだから、作品でもその通りであつて差し支へないといふことに就ては、我々の生活でもさうであることに疑問がある。社會といふ觀念が頭に浮ぶ時、それが多少とも新聞の三面記事的な意味を帶びるのは免れないことであるが、我々がしてゐる實際の社會生活では地位といふやうなことを離れた人間といふものを我々がやはり勘定に入れてゐることに氣付かずにゐるだけのことに過ぎない。我々は第一、自分の生活といふものにも大して注意を拂つてはゐなくて、それを描くのが文學であるならば、そこでは地位にも、その他の社會的な條件にも先行しなければならないのが人間自體でなければならないことになる。つまり、人間自體であつて、例へば黑岩氏が「オール讀物」の「墓地の俳優」で人間だけを扱はうとすると、その人間といふものに對する態度に何かの誤算があつて、登場人物の中の人間よりも、その異常な性格の方に氏が先に立つて引つ張つて行かれる。併し人間が一人ゐた上での宣傳部長であり、異常な性格であつて、どんな小說だらうとこの鐵則に變りがないことはポオが既に大分前に示してゐる筈である。

まだ他に擧げて置きたい作品があるが、その中でもここでは最後に「オール讀物」の永井路子氏の「青苔記」に是非とも觸れて置きたい。

その主人公ともいふべき筒井順慶は、我々の多くにとつては、秀吉と光秀の山崎合戰の時に洞ヶ峠

で模範的な待機振りを示した戰國時代の青年大名といふ他に殆ど何も知られてゐなくて、まだ三十を少し越したばかりで死んだことや、信長も一目置いてゐた手腕家だつたらしいといふことが、何か、といふのは、誰かそこにゐなければならないことを漠然と我々に感じさせるばかりだつた。永井氏はその順慶をその養子の所へ嫁に來た光秀の娘の目を通して描いてゐて、讀んでゐて我々が前から聞いてゐた人間に始めて對面する思ひをする。酷薄とか、打算的とか、或は妙に優しいなどといふのは頭が弱つた現代人が象を撫でて見た印象に過ぎない。「青苔記」には、筒井順慶がゐることが我々に信じられるから、これは歴史小説である。歴史と歴史小説がどう違ふかは難しい問題ではなささうである。事實を批評してこれを生かすのが歴史であつて、幾つかの事實を選擇してそれをそのまま我々の前に投げ出し、その印象で歴史の原形を生かすのが歴史小説である。「青苔記」には筒井順慶が生きてゐる。

五月

今月の傑作は水上勉氏が「別冊文藝春秋」に書いた「雁の寺」である。そしてこれは推理小説としてはといふ意味で言つてゐるのでもないので、傑作には常に傑作といふ一種類しかない。推理小説といふ分類に從へば、これは所謂、完全犯罪を扱つたものである。併しそれも、人間が人間を殺し始めて以來、實際には完全犯罪といふものが何百回、何千回行はれて來たか解らないことを思ふならば、

日本の推理小説界でその完全犯罪が妙な具合に誇張されて考へられてゐるのが不思議に感じられるだけのことで、この小説の前にも、例へばアガサ・クリスティイの或る作品でのやうに、さういふ行爲がそつなく描かれた所で、それ自體がどうといふことはない。讀者に筋を追つて行かせる小説である點では完全犯罪も、犯人が見付かる小説でも同じことなのである。「雁の寺」が優れてゐるのは、そのやうなことによるのではない。

言ふまでもないことかも知れないが、これは先づ第一に、一篇の優れた小説である。これは或は小説で完全犯罪を扱ふ場合にも、先づ滿されなければならない條件なのではないかとも思はれて、例へば、我々は「雁の寺」を讀んでゐて、その中の誰が殺されるのかなどといふことを考へない。そんなことを初めから讀者に思はせてゐれば完全犯罪も書き難くなる譯で、その擧句に犯罪の方は成功しても、小説はそれでは臺なしである。「雁の寺」で描かれてゐる寺の住職も、その女も、又その女を前に圍つてゐた畫家の生涯と死も、何れもこの小説の幅一杯に擴つて行く感じでそこにその銘々の位置を占めてゐるもので、從つてそこにはその他にも人物や、草や木や裸の椎の木に止る鳶や、又、京都の衣笠山の麓にある寺があつて、一口に言へば、この世界は我々が住んでゐるのと地續きになつてゐる。誰が殺されるかといふことよりも、ここにゐる人達が現在どんな風にその現在の瞬間を生きて互に交渉してゐるかを我々は刻々に知らされて、そのことで滿足し、それ故にその先が讀みたくなる。

その題に背かず、この小説に出て來る雁の繪の襖も見事である。文學作品で繪や音樂の效果を描くといふのは、誰もが試みることでありながら、實は相當な危險が伴ふことなので、それはもし我々がそれを讀んでそこに繪、或は音樂を感じなければ、その小説の世界はその個所からも脱落して行くか

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com